



伝統芸能を撮る : 国際文化振興会製作文化映画『舞 楽』

寺内, 直子

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 51:1*-19*

(Issue Date)

2018-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81010607>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010607>



伝統芸能を撮る： 国際文化振興会製作文化映画『舞楽』

寺内直子

この論文は、国際交流基金の前身・国際文化振興会（以後 KBS と略す）¹が 1939 年に製作した文化映画²『舞楽』の作品分析を通して、日本の伝統芸能がどのように切り取られ、フィルムの中に収められているかを考察するものである。この映画は、現在、宮内庁式部職楽部を頂点として、日本で伝承されている宮廷芸能の雅楽・舞楽のもっとも古い、ある程度の長さをもった映像として、大きな価値を有している。本稿では、映像と音を細かく分析し、製作者、撮影者が、舞楽のどのような点に注目し、音と映像を作りあげたのかを分析する。

1. 『舞楽』製作の背景

KBS は映画を日本の産業、教育、文化を海外に紹介するための非常に有効な手段と認識していた。『国際文化事業の 7 ヶ年：国際文化振興会事業報告』（1940 年 12 月）によれば、1940 年までに KBS が製作した映画は、以下の 33 点であった（表 1）（国際文化振興会 1940b: 42-45）。このうち、番号に○をつけたものが、東京の国際交流基金ライブラリーで視聴可能なものである。1 から 26 までは白黒映画であるが、⑳から㉓までは「天然色」版である。作品⑳、㉑、㉒、20、21 のカラー版が、㉓、㉔、㉕、29、30 であったと考えられる。作品の内容は、おおむね、扇子、和紙、提灯、生花、歌舞伎、漆器、庭園など、いわゆる伝統文化を題材としたものと、1930-40 年代当時の日本の近代的産業、教育、文化を紹介するもの、さらに、「中支要人訪日記録」「在日華僑生活之概況」などのように、外国人の来日や滞在生活を描くものなどに分けられる。

このうち、『舞楽』は、1939 年に製作された、35 ミリ、1,026 呎、白黒の映画である。その詳細は後に述べるとして、完成なった『舞楽』は、その年のイタリアの第 7 回ベネツィア映画コンクールに出品された³。サブタイトルに、

イタリア語版があるのは、このような経緯からである。ちなみに、この第7回コンクールには、劇映画として『上海陸戦隊』（東宝）、『兄とその妹』（松竹）、『土』

表1 1940年12月までにKBSが製作した映画リスト

『国際文化事業の7ヶ年:国際文化振興会事業報告』(pp.42-45)に見える文化映画一覧

(左端の番号に○のあるものは現存。国際交流基金ライブラリーで閲覧可能)

	タイトル	巻数、長さ	ミリ	製作年	言語	タイトル、アナウンス	監督、撮影	その他
1	鏡獅子	3巻、2,244呎	35ミリ	1935	英	タイトル、アナウンス	小津安二郎、松竹、歌舞伎座にて	
2	日本画家の一日	1巻、929呎	35ミリ	1936	英	アナウンス	東京J.O.スタジオ、小室翠雲の箱根別荘で	日本音楽伴奏
3	日本の活花	1巻、1,120呎	35ミリ	1937	英、仏	タイトル	東京J.O.スタジオ	日本音楽伴奏
④	日本の陶磁器	3巻、2,959呎	35ミリ	1937	英、仏	アナウンス	東宝映画、益子、名古屋	管絃楽伴奏
⑤	日本の小学校生活	3巻、2,753呎	35ミリ	1937	独、伊、仏、英、西、葡、波斯、華	タイトル	東宝映画	管絃楽伴奏、海外配布約200本
⑥	日本の庭園	2巻、1,535呎	35ミリ	1938	仏	タイトル	京都J.O.スタジオ、京都の庭園	日本音楽伴奏
7	現代日本	997呎	35ミリ	1939	英	タイトル	東宝映画	管絃楽伴奏
8	舞楽	1,026呎	35ミリ	1939	英、伊	タイトル	東宝映画	
9	興亜序曲	4巻、2,834呎	35ミリ	1940	華	アナウンス	東宝映画	管絃楽伴奏
10	在日華僑生活之概況	3巻、2,030呎	35ミリ	1940	華	アナウンス	芸術映画社	管絃楽伴奏
11	日本の建築	1巻、1,148呎	35ミリ	1938	仏	タイトル	東宝映画	
12	中支要人訪日記録	1巻、960呎	35ミリ	1939	華	アナウンス	東宝映画	
13	広東婦人団訪日記録	1巻、914呎	35ミリ	1939	華	アナウンス	同盟通信社	
14	郷土舞踊	1巻、1,000呎	35ミリ	1935	英	アナウンス	京都J.O.スタジオ	
⑬	日本風俗史考	1巻、360呎	16ミリ	1935	英	タイトル		
⑭	生花	1巻、370呎	16ミリ	1935	英	タイトル		
⑮	人形の製作	2巻、640呎	16ミリ	1936	英、仏	タイトル		英仏計120本海外送付
⑯	友禪染	1巻、472呎	16ミリ	1938	独、英	タイトル		伯林手工業博覧会出品のため製作。天然色
⑰	扇子	1巻、488呎	16ミリ	1938	独、英	タイトル	京都で撮影	伯林手工業博覧会出品
20	日本紙	1巻、353呎	16ミリ	1938	独、英	タイトル	美濃で撮影	伯林手工業博覧会出品
21	漆器	1巻、380呎	16ミリ	1938	独、英	タイトル	若狭で撮影	伯林手工業博覧会出品
⑳	日本刀	2巻、838呎	16ミリ	1939	英	タイトル	美濃関町で撮影	
㉑	傘	1巻、432呎	16ミリ	1939	英	タイトル	岐阜で撮影	
㉒	提灯	1巻、429呎	16ミリ	1939	英	タイトル	岐阜で撮影	
㉓	木版画	1巻、410呎	16ミリ	1939	英	タイトル	吉田博のアトリエ	
㉔	竹籠	1巻、466呎	16ミリ	1940	英	タイトル	飯塚琅玕齋の工房	
㉕	友禪染	1巻	16ミリ天然色	独				18の独語版か
㉖	扇子	1巻	16ミリ天然色	独				19の独語版か
29	日本紙	1巻	16ミリ天然色	独				20の独語版か
30	漆器	1巻	16ミリ天然色	独				21の独語版か
⑳	京鹿子娘道成寺	1巻	16ミリ天然色	英				
㉑	生花	1巻	16ミリ天然色	英				16と同一か
㉒	西陣織	1巻	16ミリ天然色	英				

(日活)、『太陽の子』(東宝)、文化映画として『舞楽』(KBS)、『東京—北京』(観光局)、『唸るカメラ』(理研)、『蛙の一生』(東宝)が出品された(国際文化振興会 1940b: 46-47)。また、KBSが発行していた雑誌『国際文化』10号(1940年8月)「海外に於ける日本文化紹介映画の上映報告」によれば、『舞楽』は10本程度コピーが作られたという(国際文化振興会 1940a:25-30)。

次に『舞楽』製作の経緯を見てみよう。

2. 『舞楽』の製作

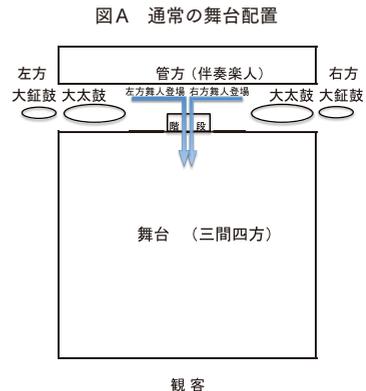
『国際文化』第5号(1939年7月号)には、『舞楽』の製作に関して、「舞楽の映画化」と題した解説がある。やや長いが、ここに全文引用してみよう(国際文化振興会 1939: 18-19)。パラグラフの改行は原文の通りであるが、ここでは便宜上、各パラグラフの頭に番号をふる。

- (1) 宮廷舞楽として連綿千二百余年の伝統をもつて今に厳然と保存されてゐる古典芸術雅楽が新しい機械芸術、映画を通じて世界に紹介されることになった。
- (2) 雅楽が、日本に輸入された時代は明瞭ではないが大体今から千五百年前から千二百年前頃迄に朝鮮、渤海、支那、印度、西域方面から輸入されたもので、これ等外国楽舞は嵯峨天皇の頃朝典楽として採用され、改作整理の上我が国でも多くの舞楽を新作し、これ等を加へて綿々今日迄千年余の歴史を経て傳へられてゐるのである。
- (3) 現在その源泉たる輸入先の各国雅楽が総て衰亡し、我が国のみにこの古代アジア文化の華とも云ふべき雅楽が保存されてゐると云ふことは、一つに我が国が文化の擁護者であらせられたと云ふことと共にこれは日本文化の寛裕な包含性を示すものに他ならない。
- (4) 本会ではかねてより、音楽の上からも舞踊の点からも、この世に隠れた古典芸術を世界に紹介したいと考へて居た処、今回幸に宮内省楽部の非常な賛意と後援を得、こゝに機は熟し愈々映画化することになったのである。

- (5) 舞曲は陵王と陪臚が選定されたが共に最も代表的なもので林邑楽に属し、前者は一人舞ひで、グロテスクな仮面を使用する。後者は群舞で古くは左右舞人が十二人出て輪をなして舞つたと云ふが現在は四人の舞ひで、いずれも楯鉾を持ち勇壮な戦ひの様を雅楽独特の動きによって現したものである。
- (6) この映画化には宮内省楽部の指導の下に研究二ヶ月余の後、東宝撮影所に委嘱し、砧のスタジオ内にセットを組んで三木茂氏のカメラの下に撮影したのであるが、製作は掲載の写真の如くセットの三方を白壁で張りめぐらし目をさえぎるものは総て排除し、舞踊そのものを忠実に浮び上らしめ、カメラも徒に技巧を勞せず、あくまで純粹に記録的な態度をとつたものである。
- (7) この陵王、陪臚の二つは一卷に纏められてゐるが各国語のアナウンス、タイトルを付し六月下旬すべて完成の上各国に配布される管である。尚さしずめ今年度のヴェニス映画展覧会には参加文化映画の一点として選定されてゐるので、近々その真価を世に問ふことになつた。

(1) では、1200余年の歴史を持つ古い芸能が、最新の映画という機械技術で世界に紹介されることへの「喜び」ともとれる記述がある。(2)と(3)では、もともとアジア大陸で生まれた雅楽が、日本に伝来後どのような軌跡をたどったかを説明し、もとの発祥地ではすでに絶えてしまっている故に、いっそう日本の雅楽に価値があることを説いている。(4)では宮内省楽部の協力が得られ、映画製作が実現したこと、(5)では具体的な曲目について解説を行っている。

(6) の情報は本稿にとって重要である。ここから、撮影が宮内省楽部ではなく、砧の東宝撮影所で行われたこと、撮影が三木茂の監督のもとに行われたことがわかる。また、撮影は、「セット



の三方を白壁で張りめぐらし目をさえぎるものは総て排除し」た状態で行われた。通常、舞楽は、中央に舞台があり、その後方左右に、豪華な装飾のある大太鼓と大鉦鼓が置かれる。管方かんかた（伴奏の楽人）は左右の大太鼓の間に並んで腰掛けて演奏するが（図A）、『舞楽』の映像を見る限り舞楽上演中に管方の姿は見えない。舞の動きと音楽は合っているので同時録音と思われるが、楽人は通常の位置ではなく、画面に映らない場所で演奏したと推測される。

撮影を指揮した三木茂（1905-1978）は、文化映画を多く手がけたカメラマン、撮影監督である。宇野真佐男作成の年表によれば、三木は、1920年代は帝国キネマ、新興キネマ社で劇映画の制作にカメラマンとして関わった。1937年10月に東宝の映画文化部に入社し、『上海』『戦う兵隊』など、現地撮影による作品を手がけた。1943年に東宝から日本映画社に移籍した。1945年には、原爆投下後の広島、長崎で現地の惨状を撮影した（映画『原爆の災害記録』）。同年11月に三木映画社を設立し、戦後も引き続き、多くの記録映画、教育映画を製作・撮影した（宇野 1982: 231-235）。

上記「舞楽の映画化」の記事は署名が無く、国際文化振興会の編集者が、『舞楽』制作者に取材して記事にしたものと推測され、(6)は恐らく撮影監督の三木の意見を伝えていると考えられる。「舞踊そのものを忠実に浮び上らしめ、カメラも徒に技巧を勞せず、あくまで純粹に記録的な態度をとつた」というのが、文化映画『舞楽』の基本方針である。実際の映像を見ると、所々にクロスアップがあるものの、おおむね、舞人の全身が入り、舞の動きがわかるようなフレームワークで構成されている。クロスアップは適当に行われているのではなく、舞の特徴と結びつき、クロスアップすべき箇所が入念に選ばれているように思われる。残念ながら、時間の制約からか、数カ所で途中省略がある。

この映画は、冒頭に、短い楽曲を背景に、簡単に舞楽と収録曲を紹介する字幕がある。その後、『陵王』りょうおう（左舞、唐楽さまい伴奏、一人舞）と『陪臚』ばいろ（右舞、唐楽伴奏（夜多羅拍子）、四人舞、武の舞）の2つの舞楽が収録されている。前者は数カ所の固定点から撮影し、異なる角度のショットを細かくつないで編集しているのに対し、後者はロングショットが多く、カメラの視線が左右上下に移動するパンニングやカメラ自体が横に移動するトラッキングの手法なども採

用している（詳しくは後述）。

3. 『舞楽』の映像と音

映画『舞楽』は、幸いにも国際交流基金ライブラリーに現存し、復刻DVDで視聴が可能である（請求番号：090.8/8/32）。約11分の長さがある。収録場面のすべてをショットの単位で並べたものが表2である。表の記述については、個々の演目の考察で説明していく。

表2 KBS『舞楽』の構成

備考1「通し時間」はこの映画全体の時間、「セッション時間」は冒頭部、《陵王》、《陪臚》、終結の各セッション内の時間。
備考2「音」の欄の「小節」は、伝統的雅楽の楽曲で「小拍子」と呼ばれる単位に当たる。

通し時間	セッション時間	ショット	カメラ位置	内容	音	
《冒頭部》						
00:10-00:13	00:10-00:13	1	左から	左方大太鼓の右半分と管方楽人【字幕A】		
00:13-00:23	00:13-00:23	2	左から	管方クロースアップ／笛音頭吹き始める【字幕B】	笛の音、笙の音	
00:23-00:28	00:23-00:28	3	右至近距離から	笙音頭アップ【字幕C】	笙の音	
00:28-00:36	00:28-00:36	4	右至近距離から	笛音頭アップ【字幕D】	笛の音、箏の音	
00:36-00:44	00:36-00:44	5	左真横から	箏音頭アップ【字幕Eつづき】	箏の音	
00:44-00:56	00:44-00:56	6	右至近距離から	笙音頭顔のアップ【字幕E】	笙に笛の音かぶる	
00:56-01:08	00:56-01:08	7	右至近距離から	笛音頭口元のアップ【字幕Eつづき】	笛の音	
場面転換						
《陵王》						
01:09-01:25	00:00-01:16	1	左下から上にティルト	無人の舞台（奥に大太鼓が見える）	音取がおり無音	
01:25-01:30	00:16-00:21	2	舞台右奥（階段後方）から①	階段のアップ／舞人階段に近づく	無音	
01:30-01:32	00:21-00:23	3	大太鼓の後ろから②	大太鼓を打つ楽人	この間、時々太鼓の音	
01:33-01:33	00:24-00:24	4	舞台右奥から①	舞人階段登る		
01:34-01:35	00:25-00:26	5	大太鼓の後ろから②	大太鼓を打つ楽人		
01:36-01:37	00:27-00:28	6	舞台右奥から①	舞人階段登る		
01:38-01:38	00:29-00:29	7	右真横から	陵王舞人頭部アップ		
01:39-01:39	00:30-00:30	8	舞台右奥から①	階段登り終わる舞人		
01:40-01:42	00:31-00:33	9	大太鼓の後ろから②	大太鼓を打つ楽人		
01:43-01:43	00:34-00:34	10	右真横から	陵王舞人頭部アップ		
01:44-01:46	00:35-00:37	11	正面から	陵王舞人頭部アップ		無音
01:47-01:53	00:38-00:44	12	正面から⑤	陵王舞人バストショット／舞い始める		小節1-2
01:54-02:03	00:45-00:54	13	左から③	舞人全身／舞い始め（右大太鼓映る）	小節2-11	
02:04-02:54	00:55-01:45	14	左から③	舞台全体／やや長いショット		
cut						
02:55-03:15	01:46-02:06	15	左から③	舞人全身（右大太鼓映る）舞人が画面右に移動し、カメラも少し右にパンする	小節13-17	
cut						
03:16-03:40	02:07-02:31	16	正面から⑤	舞人右真ん中から正面に戻るあたり	小節26-32	
cut						
03:41-03:49	02:32-02:40	17	ほぼ右真横から⑥	舞人舞台中央から右に移動する（右真横から撮っているので舞人がこちらに近づくように見える）	小節33-34	
03:49-04:00	02:40-02:51	18	正面から⑤	ショット24の動作の続き／（舞人の上半身右手側が見える）	小節35-40	
04:01-04:16	02:52-03:07	19	左から③	ショット25の動作の続き／舞人全身	小節40-43	
04:17-04:24	03:08-03:15	20	左上から④（注1）	ショット26の動作の続き／舞台全体	小節43-48	
cut						
04:24-05:01	03:15-03:52	21	右上から⑦	蝶々のような腕の動きで、舞台左前に戻るところまで／ショット27よりテンポがかなり早まる	小節82-98	

cut					
05:01-05:14	03:52-04:05	22	左から③	舞台全体／舞人舞い始めの位置に戻る／舞人が画面左に移動し、カメラも少し左にパンする	小節113-119
05:15-05:26	04:06-04:17	23	正面から⑤	舞人全身、腕を揚げて最後のポーズの準備	小節119-124
05:26-05:32	04:17-04:23	24	正面から	上を見上げる舞人頭部のアップ	小節124-126
05:32-05:37	04:23-04:28	25	正面から	上に上げた右手のアップ（岐呂利の動き）	
05:38-05:44	04:29-04:35	26	正面から⑤	腕を戻すとともに面のアップ	止手
場面転換					
《陪臚》					
05:48-06:52	00:00-01:04	1	左から③	はじめ舞人二人（二薦、四薦）、カメラ引いて四人	小節1-8(一帖)
cut					
06:52-07:25	01:04-01:37	2	右から⑧／カメラ左に移動	舞人二人（一薦、三薦）振りながら左にトラッキング	小節44-50
07:26-08:09	01:38-02:21	3	右上から⑦	舞人四人、太刀を抜き(07:26)、楯を持つ(08:00)	小節50-68(二帖)
08:10-08:24	02:22-02:36	4	右から⑧	一薦バストショットから足元ヘティルト・ダウン	小節68-80
08:24-08:42	02:36-02:54	5	左から③	舞台全体（四人）	小節80-88
08:42-09:09	02:54-03:21	6	左近くから	一薦、三薦全身	小節88-90
cut					
09:09-09:15	03:21-03:27	7	左近くから	全身のショット、一薦と三薦が二薦と四薦と入替る	小節105-108(三帖)
09:13-09:22	03:27-03:34	8	正面から⑤	一薦のアップ、そのまま一薦に合わせてカメラ右へパン	小節108-111
09:23-09:58	03:35-04:10	9	左上から④	舞台全体、後半で一薦と三薦が二薦と四薦と入替る	小節111-131
09:58-10:48	04:10-05:00	10	左手前遠くから⑨	カメラかなり引いて、舞台全体と大太鼓など撮る 舞人一回転して各定位置に戻る	小節131-144 乱声止句(10:32-)
場面転換					
《終結部》					
10:48-10:50	05:00-05:02	1	左から	大太鼓と管方楽人	
10:50-10:59	05:02-05:11	2	右から	管方楽人左側から右側にパン	
10:59-11:09	05:11-05:21	3	大太鼓の正面上方	太鼓の日形からティルト・ダウンして火炎装飾と鼓面まで	

注1 舞人の後方にあるべき大太鼓が写っておらず、他のショットとは別の時に撮られた可能性がある。

3-1. 冒頭シーン

《陵王》と《陪臚》の映像に入る前に、冒頭には、雅楽の伝統を説明するシーンが挿入されている(0:10-01:08)。映像としては、伴奏の管方楽人が左右の大太鼓の間に、通常の舞楽演奏時のように座っているショット、龍笛、篳篥、笙の演奏のショットなどが収録されており、雅楽の楽器を映像で説明しているように見える。冒頭の、楽人の集団を左方向から撮影した画面以外は、左斜め、右斜め、または右真横から至近距離で楽器演奏をクローズアップするショットが多い。

音楽⁴はそれぞれの楽器の演奏画面となるべく重なるように付けられているが、指遣いと音楽が合っていない部分が多く、この部分の映像と音楽は別々に収録され、あとで組み合わせられたと考えられる。また、前述した通り、舞楽の演技の時には、管方は画面に映っていないので、冒頭のシーンは、舞楽本体とは別に収録されたと推測される。

同様に、映画の最後で管方楽人がもう一度画面に登場する部分（10:48-10:59）も、舞楽の収録とは別に撮られたと考えられる。こちらでは、楽人は演奏せず、ただ座っているだけである（音は背景に流れている）。

冒頭シーンには、次のような英語の静止字幕（字幕 A,B,C）とムービー字幕（字幕 D,E）が付けられている。

字幕 A（製作者のクレジット）

Produced by the Kokusai Bunka Shinkokai

The society for International Cultural Relations

Tokyo

（左方大太鼓の右半分と管方楽人が映っている画像に重ねて示される。）

字幕 B（この映画のタイトル）

The Bugaku Dance

（管方がクローズアップされ、笛の音頭^{おんど}が吹き始め、笙の音も聞こえて来る場面に重ねて示される。）

字幕 C（演奏者のクレジット）

Music and Dance by the Music Department, Imperial Household.

（笙の音頭の顔がアップになり、笙の音が聞こえてくる画像に重ねられる。）

字幕 D（舞楽の歴史の説明）

In the ceremonial dance and music of the Bugaku is reflected the exquisite culture of the ageless East. After 1200 years, the Bugaku, through Court protection, has been able to retain its original forms only in Japan.

（下から上に流れるムービー字幕で、笛の音頭のアップ、箏篋のアップとそれぞれの音が聞こえてくる画像に重ねられる。）

字幕 E（《陵王》と《陪臚》の説明）

In the first example, Ryô, the dance portrays the grace and dignity of Ran Ryôwô, invincible warrior king of North Ch'i, who wore a mask on the battlefield to conceal the effeminate beauty of his face.⁵

The second example, Bairo, is an impressive display of the military arts. This musical dance was introduced from Indo-China and was once performed at the birthday ceremonies of Buddha.⁶

(下から上に流れるムービー字幕で、笙の音頭のアップ、笛のアップ(口元)とそれぞれの音が聞こえてくる画像に重ねられる。)

以上をまとめると、この冒頭部分は、字幕では舞楽の歴史やこれから見る舞楽曲の概説をしているが、映像と音は伴奏楽器の形状、奏法とその音を説明していることがわかる。つまり、字幕の説明内容と映像・音の内容にはギャップがあると言える。

3-2. 《陵王》

《陵王》は「蘭陵王」とも呼ばれ、舞人は豪華な刺繍のある裱襦装束^{りょうとう}を着用し、龍の彫刻を施した異形の面をかぶって舞う。舞台上の奥、手前、左右を使い、舞人が闊達に舞い踊る走舞^{はしりまい}に分類される⁷。唐楽を伴奏に舞われる左舞に属する⁸。《陵王》は、通常は、舞人が舞台に登壇して踊る前奏的な舞「出手」、楽曲の本体である「当曲」、舞人が舞台から退く「入手^{いりて}」の部分から成る。しかし、この録画では出手と入手は省略されている。通常の演舞では、当曲だけでも13,4分程度かかるが、この映画では4分35秒ほどに縮められている。

《陵王》は、舞台奥の楽屋側から階段を映したショット1から始まる(01:09)。舞人が現れ、階段を登る動作と、大太鼓を楽人が打つ動作が、1秒前後の短いショットで交互に現れる(ショット2～6)。太鼓の音は聞こえるが、舞人の動作とは関係ない⁹。舞人が階段を登り終わったところで、右の真横から(ショット10、01:43)と、正面から(ショット11、01:44)、舞人の顔(面)をクローズアップして見せる。このクローズアップは《陵王》の見所の一つである豪華な仮面を観客に向かって印象的に見せる役割を果たしている。

次に、舞人の正面からのバストショットに切り替わり、舞人が当曲を舞い始める（ショット 12、01:47）。バストショットでは上半身の動きしかわからないので、すぐに左（下手）から、舞人の全身が入るショットに切り替わる（ショット 13、01:54）（図 1）。さらに、少し手前にカメラを引いて、舞台全体が見えるショットに切り替わる（ショット 14、02:04）（図 2）。芸能学や舞踊学の立場から舞踊の記録映像を撮る際に基本として重要なことは、後に映像を見て、その舞踊が再現できることであるが、そのためには、常に舞人の全身が画面に入り、さらに、舞台上の位置がわかるような映像を撮ることが肝要である。この点、この映画は、冒頭と最後の面や手の先のクローズアップ以外は、ほとんど舞人の全身が入るショットで構成されていて、芸能学、舞踊学的記録価値は高いと言えるだろう。

《陵王》はだいたい左から舞人もしくは舞台全体が入るショットになっている。このアングルで撮られているのは、舞人の演技が舞台中央奥から右にかかる位置で行われている場面である。つまり、舞台右の方で行われる舞を対角線上の左側のカメラから撮っているのである。推定されるカメラの位置をまとめると、図 B の通りである。図 B 中の①～⑦の番号は表 2 の「カメラの位置」欄の数字と対応する。舞人の全身が入るショットは比較的低い位置から（図 B-③）、舞台全体が入るショットは比較的高い位置から、俯瞰するように（図 B-④、ショット 20）撮られている。

図1 《陵王》ショット13

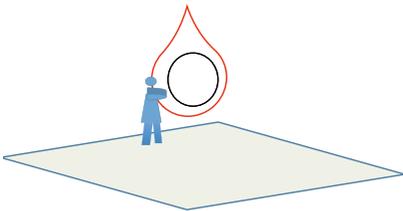
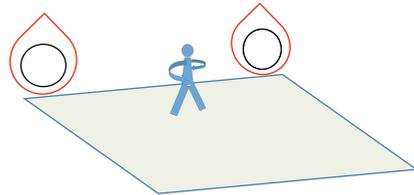


図2 《陵王》ショット14



右から撮られているのはショット 17 とショット 21 だけである。ショット 17 は、舞人が舞台中央から右に向かって歩く場面で、カメラは右真横から（図 B-⑥）上半身のアップを撮っているので、画面では舞人がこちらに近づくと

うに見える。ショット 21 は、舞台の左側を使って舞う動作を、対角線上の右側のカメラから（図 B-⑦）撮っている（図 3）。

図 B 《陵王》におけるカメラの位置

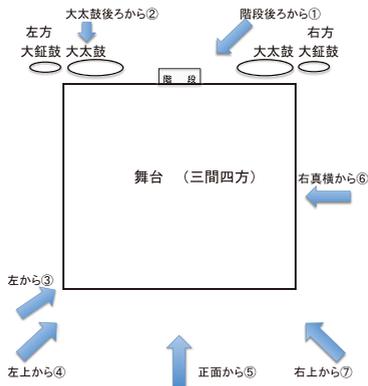
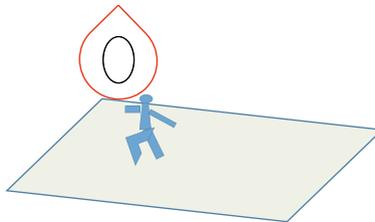


図3 《陵王》ショット21



全体に当曲の音楽と舞はよく合っているので、同時録音と思われる。ただし、残念ながら、時間の制約で、《陵王》当曲は途中 5 箇所ですべて省略がある（表 2 で cut と記した部分）。ショット 20 と 21 の間には、音楽の小節にして 34 小節のギャップがある。この間、楽曲がかなり進んだことは、ショット 20 に比べショット 21 の音楽のテンポが大幅に速まっていることから感じられる。

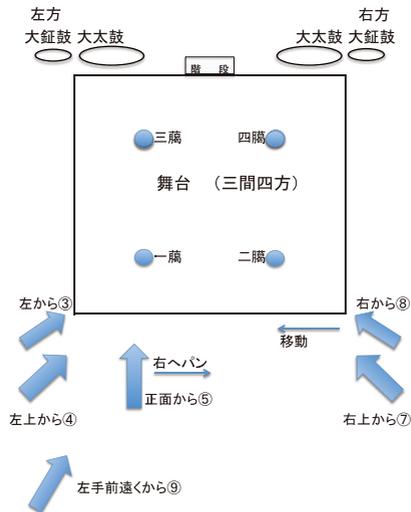
3-3. 《陪臚》

《陪臚》は唐楽曲を伴奏とするが、例外的に右舞に分類されている¹⁰。楽曲としては早只拍子（4分の6拍子）と夜多羅拍子（4分の5拍子）という異

なるリズムの演奏法があり、しばしば管絃¹¹合奏は早只拍子、舞楽は夜多羅拍子で演じられる。この録画でも、舞楽・夜多羅拍子が収録されている。舞の本体は破と急という二楽章から成るが、ここに収められているのは破の楽章である。《陪臚》(破)の楽曲を三回繰り返し、一回目(一帖)は両手で剣印¹²を作り舞い、二回目(二帖)で太刀を抜き、楯を取る。この映像では二箇所中断があり、最初の間断は冒頭直後にあり、音楽にして約72秒分程度省略されている。次の中断は28秒程度で、二帖から三帖に移るところにある。通常8分弱かかる《陪臚》(破)の当曲を、この映像では5分に収めている。

舞人は、裃褙装束を着用し、腰には太刀を佩き、楯と鉾などの小道具も使用する。四人の舞人は、舞台上の四隅の位置で舞うが(図C)、中央で一直線になったり、右列の二人と左列の二人が入れ替わるなどのフォーメーションの変化もある。一番上位の舞人を一臚といい、順次、二臚、三臚、四臚と続く。

図C 《陪臚》におけるカメラの位置



《陪臚》は、斜め左のカメラ位置から(図C-③)右側に立つ二人の舞人(二臚、四臚)の全身を映すショットから始まる(ショット1)(図4)。音楽が進むにつれ(小節1-8)、舞人四人全員が映るようにカメラを引いていく(05:48-06:52)

(図5)。

図4 《陪臚》ショット1

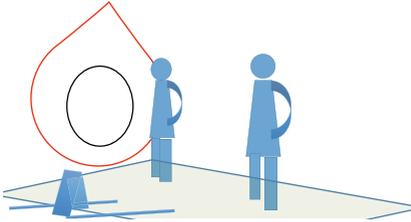
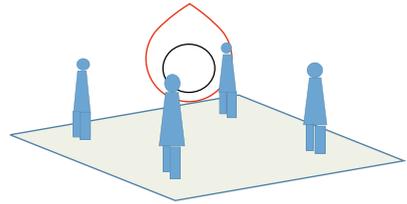


図5 《陪臚》



すぐに音楽が小節44まで飛ぶ(6:52)。ショット2から4までは、カメラは右側から撮っている。ショット2では、舞台左側にいる一臚と三臚を右側から撮りながら(図6)、カメラ自体がゆっくり左に移動していくトラッキングの技法を用いている(図C-⑧)。舞人四人が太刀を抜き、楯を持つ場面(ショット3)はこのあたりより二帖、右側から舞台全体が入るショットで撮っている(図C-⑦)(図7)。ショット4は、一臚のクローズアップで、上半身から足下ヘティルト・ダウンして、足の動きを捉えている(図8)。ショット5、6は、今度は左側から撮っていて、舞人全体から一臚・三臚だけのショットへ切り替わる。

図6 《陪臚》ショット2

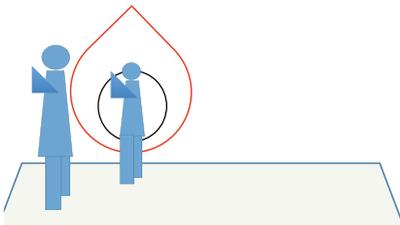


図7 《陪臚》ショット3

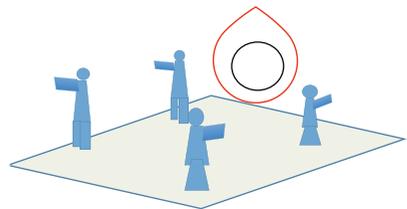


図8 《陪臚》足下のアップ

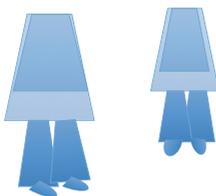
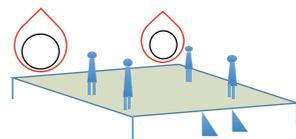


図9 《陪臚》ショット10遠景



再び、中断があり、音楽は小節 105 へと飛ぶ (9:09) (このあたりより三帖)。ショット 7 から 10 までは、それぞれに異なるカメラ位置から撮影されている。ショット 7 は、舞人の比較的近くから撮っていて全身が画面に入るショットで、一藤と三藤が二藤と四藤と入れ替る動作を捉えている。次のショット 8 では、一藤のクローズアップになり、一藤の移動に合わせて、フレームも右方向にパンしている (図 C-⑤)。ショット 9 と 10 は、舞の終盤の場面で、左上から舞台全体を収めるショット (図 C-④) と、さらにカメラを引いて、遠くから舞台を俯瞰するようなショットで終わっている (図 C-⑨) (図 9)。

舞の終りに、舞人が一回転してもとの位置にもどる動作をする間、^{らんじょうとめく}乱声止句という音楽が演奏される。本来ならば、この音楽が続いている間に、舞人が中央に寄って跪き、楯を置いて、次の急の楽章の準備をするが、この映像では舞人の動作を追わずに画面が切り替わり (10:48-)、冒頭と同じように管方楽人を映し、さらに、大太鼓の装飾を映して (10:59-)、映画が終る (11:09)。

4. 『舞楽』の目的と手法

以上が、『舞楽』の内容構成である。《陵王》は途中の省略が 5 回あり、全部で 26 ショットから成るのに対し、《陪臚》の途中省略は 2 回で、10 ショットから成る。「途中省略」は、上演の時間の流れが中断し先へ飛ぶことを意味する。つまり、《陵王》の方が、演技時間の省略が多く、《陪臚》のほうが、まとまった長い時間の流れを収めていることになる。それを模式図にすると、図 10 のようになる。

図 10 《陵王》と《陪臚》の時間の流れ (▲は途中省略される場所)



《陵王》の冒頭 (ショット 1～11) は、1、2 秒の短いカットが矢継ぎ早に切り替わり、舞台、階段、大太鼓、舞人の全身、面などが示される。この部分では、とりわけ陵王の仮面のクローズアップが多い。この部分は、舞が始まる前段階であり、舞踊としての動きよりも、舞台、装束、大太鼓などのしつらえ

が、ほとんどスタイル写真のスライドショーのように次々と提示されるのが大きな特徴といえるだろう。舞人が舞い始めるショット12からは、数秒から十数秒の、相対的に長いショットになって行く。クロースアップは《陵王》の最後の部分にも見られる。この場面は、舞人が右手を頭上に高く上げ、持っているバチを水平に傾けた後、素早く縦に戻す仕草（「岐呂利」という型）が特徴である。カメラもここで、見上げる舞人の頭部（仮面）（ショット24）、岐呂利をする右手の動き（ショット25）をクロースアップで捉えている。つまり、《陵王》に見られるクロースアップのショットは、豪華な仮面、装束、大太鼓、舞の特徴的な動きなどの「見所」にスポットをあてるという明快な意図が見て取れるのである。それ以外の部分、つまり、舞人が舞台上を動きつつ舞う部分は、おおむね、舞人の全身もしくは舞台全体が入るショットで、舞の動きがよくわかるように撮られている¹³。複数の角度から撮影しているが、各々のカメラのフレームはほぼ固定して動かない¹⁴。

一方、《陪臚》は四人の舞人が、舞台の四方に立ち、原則として同じ動きで舞う演目である¹⁵。多人数で舞う点で、舞踊的には走舞ではなく平舞に近い特徴を持つが、《陪臚》の場合は鉾や楯などの武具を携えていて、「武の舞」に分類される。

《陪臚》のフレームは、大雑把に分けると、1) 舞台全体を映す（舞人全員が入る）、2) 一藁と三藁の全身、もしくは二藁と四藁の全身を映す、または3) 舞人のクロースアップ（顔、バストショット、または足もと）に分けられる。2) は画面いっぱいに舞人の全身を入れることによって、舞の動きの特徴をより詳細に捉えることができるが、全体のフォーメーションはわからない。《陪臚》のような群舞ではフォーメーションも一つの見所であるので、その場合は1) のフレームの方が有効であると言えよう。

《陪臚》は《陵王》に比べて、カメラの移動やパンによってフレームが動くのが特徴である。たとえば、舞人二人から全員が映るようにカメラを引いたり（ショット1）、舞人のバストショットから足下に視線を移動したり（ティルト・ダウン）（ショット4）、舞人に焦点を当てながらカメラが左に移動したり（トラッキング）（つまり舞人が見える角度が変わる）（ショット2）、舞人の移動

とともにフレームもパンするなどのショット(ショット8)が見られる。つまり、全体に《陪臚》の方が、フレームが変化し、カメラの視点に動きがあるように感じられるのである。

すでに紹介したように、この映画の撮影では「舞踊そのものを忠実に浮び上らしめ、カメラも徒に技巧を勞せず、あくまで純粹に記録的な態度をとつた」とされる。クローズアップが必要なところはそうするが、全体に舞人の全身が入り、舞の動きがわかるようなフレームワークで舞の動きの特徴をとらえようとする意図が感じられる。

最後に触れたいのは、途中省略のことである。映画で芸能の記録を残したいと考えるならば、演技の最初から最後まで、中断なしに1ショットで収録するのが理想である(藤岡 2006)。しかし、この映画ではそうっていない。この映画の第一の目的は、後世に残る記録を作ることよりも、外国人にわかりやすく、舞楽のエッセンスを紹介することにあるからである。「記録的な態度をとつた」とあるが、それはあくまで劇映画と比較して相対的に「記録的」なのであり、すでに述べた通り、《陵王》(当曲)は13、4分のを4分半程度に、《陪臚》は8分弱のところを5分に短縮している。同じような舞振りの部分をカットし、外国人が見ても飽きないように、できるだけ異なる部分が見えるように編集したものと推測される。

このように、演技の最初から最後までが収められているわけではないという憾みは残るが、KBS文化映画『舞楽』は1940年頃の宮内省の舞楽の実践を留めた映像として貴重である。特に、芸能学、舞踊学、音楽学の観点からは、当時の舞の型、伴奏音楽のフレーズ、テンポなどを証言する資料として計り知れない価値を有している。また、映像研究の点では、芸能の記録映像の先駆として、後世の芸能記録映像やドキュメンタリー映像にどのような影響を与えたのかに関して、多くの示唆を与える作品であると言えるだろう。

1 1934年に外務省と文部省の下に設立された財団法人。日本文化や日本の現状を海外に知らしめるための資料作りや発信を行った。1972年に国際交流基金に改組した。英語の正式名称はThe Society for International Cultural Relationsだったが、日本名のローマ字表記Kokusai Bunka Shinkokaiの頭文字をとった略称KBSを会自身がしばしば用いた。

- 2 文化映画は、劇映画に相対するジャンルで、教育や啓蒙のために製作された記録的性質の強い映画。
- 3 ベネツィア映画コンクールへの日本映画の出品は、1937年の第5回コンクールから行われている（『国際文化』10号、1940年8月、pp.46-47）。
- 4 壱越調の《音取》と思われるが、断片的である。
- 5 北斉の王・蘭陵王長恭はあまりにも美男だったため、兵たちが見とれて戦おうとしなかったため、戦場では仮面を付けるようになった、という故事『教訓抄』（伯近真撰、1233年）を指す。
- 6 林邑楽の一つとされ、唐招提寺の四月八日の陪臚会で演じられたという故事（『教訓抄』（伯近真撰、1233年）を指す。
- 7 四～六人の舞人が、優雅に舞うものは平舞と呼ばれる。
- 8 右舞は若干の例外を除き、高麗楽を伴奏に舞われる。
- 9 舞人の登壇を伴奏する「陵王乱序」ではなく、大太鼓の音がまばらに時々聞こえるだけ。
- 10 《陪臚》《抜頭》《還城楽》は唐楽伴奏とするが右舞として上演されることが多い。
- 11 舞がつかない器楽合奏のみの演奏法。
- 12 人差し指と中指だけをたてて、残りの指を握る手の形。
- 13 ショット17では舞人が舞台中央から右方向に歩く動きだが、カメラは舞台の右の真横から撮っているので舞人がこちらに近づくように見える。この部分については、むしろ正面から撮って、舞人が高く足をあげる動きを収録したほうが舞踊学的には意味があるように思われる。カメラマンがどうしてこの角度から撮影したのかは、やや意図が不明。
- 14 ただし、ショット15では、舞人が画面右に移動する際に、カメラも少し右にパンする。
- 15 ただし、方向として一臚・三臚と二臚・四臚が向かい合わせや、片方が正面向き、他方が後向きなどの対照を成すことがある。

参考文献

- 宇野真佐男 1982『幻の原爆映画を撮った男：三木茂 映像に賭けた生涯』東京：共栄書房。
- 国際文化振興会 1939『国際文化』第5号（1939年7月号）東京：国際文化振興会。
 ---1940a『国際文化』10号（1940年8月）同前。
 ---1940b『国際文化事業の7ヶ年：国際文化振興会事業報告』同前。
- 伯近真 1233『教訓抄』（植木行宣校注『古代中世芸術論』岩波書店、1973所収）。
- 藤岡幹嗣 2006「RVMVにおける映像記録化の実際」中島貞夫監修、山口修、月溪恒子編『音をかたちへ：ベトナム少数民族の芸能調査とその記録化』京都：醍醐書房、45-53頁。

Filming a traditional performing art: a cultural film “Bugaku” produced by Kokusai Bunka Shinkôkai (KBS)

TERAUCHI Naoko

This article examines how the Japanese traditional performing art *bugaku* dance was documented in a film “Bugaku” produced by Kokusai Bunka Shinkôkai (KBS) in 1939. This film is invaluable in that it is the oldest record of *bugaku*, imperial court dance of Japan, performed by the imperial dancers and musicians and it tried to present a complete picture of *bugaku*. This article analyzes visual and audio aspects of the film and clarified the intentions both of the producer and the film director.

This film includes two pieces “Ryôô (*samai*),” solo dance, and “Bairo (*umai*),” group dance, both abbreviated by editing. Detailed analysis reveals that “Ryôô” has five discontinuations, while “Bairo” only two. This means that “Bairo” is a more faithful representation of its performance. In terms of shooting angles and camera work, “Ryôô” was shot from seven different angles but each shot was fixed. On the other hand, in “Bairo,” the camera is not always fixed and sometimes used panning, tilting, and tracking so that the audience could feel more in tune with the camera’s gaze.

The basic method of filming is explained as follows; ‘it employs purely documentary attitude and avoids using too many elaborated techniques, in order to faithfully present the actual choreography.’ However, the primary purpose of this film seems to be to introduce the essence of the dance rather than to document whole performance, since several sections are known to be cut. Thus, the ‘documentary attitude’ in “Bugaku” could be interpreted as ‘relatively

documentary' in that it was not completely faithful to its subject matter.

Keywords: *bugaku*, cultural film, Kokusai Bunka Shinkōkai, documentary

キーワード：舞楽、文化映画、国際文化振興会、ドキュメンタリー